



専修大学

国際コミュニケーション学部

2022年度

千
代
田
学

千代田区歌

作詞.. 佐藤 春夫
作曲.. 山田 耕筈

並ぶ官庁 広場 濠
帝の宮居 とりめぐり
わが千代田区に誉あり
大東京の中心地
江戸の名残も風情にて
ここを都の都ぞと
澄めり千代田の城の月



専修大学校歌

作詞.. 高野 辰之
作曲.. 信時 潔
編曲.. 岡本 仁

宮城の北 枢地に立ちて
礎固し 我等が大学
質実は姿 真摯は心
学徒幾千 理想に生きて
済世の道 ここに学び
経倫の策 ここに極む

巻頭あいさつ	…3
〈特集〉 メキシコの「死者の日」	…4
メッセージ 講演会開催によせて	…5
公開講演会 「死者を弔う、死者と過ごす」	…6
展示企画 「死者の日」の祭壇づくり	…10
〈ゼミの取り組み〉	
展示 フランスのクリスマス「クレッシュ」 根岸徹郎ゼミ	…13
神保町コミュニティ 今井ハイデゼミ	…14
千代田区とカナダ・ドイツ・フランス 柴田隆子ゼミ	…15
Korea in Chiyoda ジミンギョンゼミ	…16
〈官学民連携〉	
永田町散策	…17
〈コラム〉	
御宿 × メキシコ × 専修大学	…18
千代田区永田町二丁目の原風景	…19
雉子橋のフランス大使館	…20
学生の声	…21

千代田区の**文化的多様性**における **歴史的国際性**に関する調査・研究

「千代田学」は、千代田区とそこにある大学をはじめとした教育機関が密接に連携をして、さまざまな切り口で調査・研究を行い、そこに住む人と学ぶ人の深い結びつきを探る、意義深いプロジェクトです。わたしたちは、令和4年度採択の「文化的多様性を持つ千代田区の国際性に関する調査・研究——千代田区における多文化・国際性という特色をどのように活かしていくか」というテーマのもとに、学生と地域の人々、そして学生が留学する世界各地の人々の間をどのように結びつけるのか、という問題を常に念頭に置きつつ、2022年4月より調査・研究を進めて参りました。



専修大学は1880年に誕生し、1885年に現在の地へと移転してから長く千代田区と関わってきましたが、国際コミュニケーション学部は本学の8番目の学部として、2020年に神田神保町に設立されました。日本語学科と異文化コミュニケーション学科の2学科で構成されていますが、とくに異文化コミュニケーション学科では1学年150名の学生が必ず留学するというプログラムを組んでいます。

こうした経験を持つ学生が主体となって、若い目で新たな視点を千代田区にもたらすことを目指した取り組みとして、わたしたちはこの千代田学プロジェクトを位置づけてきました。そしてこれまで、メキシコ大使館との連携による「死者の日」を巡るシンポジウムと祭壇の作成、フランスのクリスマスを紹介するクレッシュによる聖誕のジオラマ作り、また江戸東京ガイドの会の方々との共同作業での千代田区の街歩きといった企画を進めてまいりました。また、本学科のさまざまなゼミの学生さんの参加を得て、千代田コミュニティラボにも参加をいたしました。あるいはメキシコと千代田区の関わりから発展して、房総の御宿にあるメキシコと日本、さらに専修大学のあいだにある偶然ともいえる深い結びつきへと、視野は広がります。

本冊子は、そうした一連の活動の記録であるとともに、千代田区の持つ多様性・国際性をもう一度見直すためのガイドとして準備をしたものです。と同時に、これからさらに、このテーマを深化させるための新たなスタート地点として位置付けています。

コミュニケーションを支えるのは、お互いをよく知りたいという気持ちであると同時に、そのためには何をすべきなのかという問いを立て、しっかりと考える力です。机の前に座っているのではなく、また人の話を聴くだけではないところからスタートすることが大切だとわたしたちは考えます。メキシコの「死者の日」の祭壇やフランスのクリスマス飾るクレッシュの存在を知ったなら、次にそれを自分たちでも作ってみる。千代田区に様々な国際的な文化遺産があることに気が付いたら、自分の足で歩き、目で見ると——この冊子が単なる知の記録ではなく、若い学生さんたちに知的好奇心の軌跡であり、さらに「考えるヒント」となって次のステップへの足掛かりとなることを、わたしたちは強く願っています。

専修大学 国際コミュニケーション学部長 根岸 徹郎

〈特集〉

メキシコの「死者の日」

「死者の日」は、亡くなった先祖の霊を迎え、それらの霊と過ごすメキシコの伝統行事です。2008年には、ユネスコの無形文化遺産に登録されました。近年では、アメリカ合衆国で制作されたアクション映画やアニメーション映画で取り上げられ、日本でもその存在がよく知られるようになりました。



「死者の日」は、カトリック暦の11月1日（全ての聖人の日：万聖節）と11月2日（信仰を持って逝った全ての人の日：万霊節）に主に行われます。地方によっては、10月31日やその数日前から死者を迎える儀式が行われるところもあります。先住民人口が多い南部オアハカ州の各地や、観光地でもある西部ミチョアカン州パツクアロ湖のハニツィオ島などの「死者の日」がとくに有名です。一方、先住民村落だけでなく、都市部の一般家庭においても、家の中に祭壇を設けたり、墓地を美しく飾ったりして死者を迎えます。また最近では街の中心部で行われるパレードなどさまざまな行事が開催されています。

親愛なるアミーゴのみなさま、こんにちは。駐日メキシコ大使のメルバ・プリーアです。本日、専修大学で開催されている「死者の日」に関する講演会へご参加の全ての方みなさまにご挨拶申し上げます。皆さまにご参加頂きとても嬉しいことはもちろん、私たちにとって非常に重要な意味を持ち、ちょうど今頃の11月1日と2日に祝われるこの行事に興味をもって頂きとても光栄です。



私たちの先住民文化ではかつて、無病息災を祈り、そして先祖たちを迎えるため、その年の収穫物を捧げていました。多民族多文化国家のメキシコでその行事は、時の経過とともに変容していき、やがて先祖や故人を偲ぶ私たち特有の伝統が生まれていきました。「死者の日」とはメキシコ人にとって、死に思いを馳せるだけでなく、「生」を祝う日なのです。愛する故人と生者が一堂に会し、飲食を共に楽しみ、その場を飾る花々や色彩が表す「生」の喜びを祝うのです。

この伝統がもつ固有性、文化的価値が認められ、2003年11月には、ユネスコの世界無形文化遺産に登録されました。この意味において、本日の貴重な機会をご用意いただいた小林貴徳先生ならびに井上幸孝先生、そしてもちろんご参加頂いた生徒の皆様にご心からの感謝を申し上げます。また、「死者の日」について特別にご講演いただくアルフォンソ・ガルドゥーニョ先生のご協力に御礼申し上げます。

こうした機会を経て、メキシコと日本の関係はさらに深まります。メキシコの文化について学びを深める機会となることを確信しています。ありがとうございました。

駐日メキシコ大使 メルバ・プリーア

Queridos amigos, buenas tardes. Soy Melba Pría, la Embajadora de México, aquí en Japón. Y les doy la más cordial bienvenida a esta conferencia sobre el Día de Muertos que hoy se realiza en la Universidad Senshu. Me da mucho gusto que estén aquí, pero, sobre todo, les agradezco el interés que pueden tener en esta festividad que para nosotros es tan importante y que se festeja alrededor del primero y el dos de noviembre en mi país.

Nuestras culturas indígenas rendían a culto a los antepasados ofreciéndoles los productos de la cosecha para pedir su apoyo y protección y recibirlos en la casa. A través del tiempo, la nación mexicana pluriétnica pluricultural ha hecho y ha creado una forma muy particular de relacionarse y de recordar a los antepasados muertos. Y el Día de los Muertos, más que un culto a la muerte, es un canto a la vida, nosotros los mexicanos celebramos la vida el Día de los Muertos. Es un momento privilegiado, en donde los vivos y los muertos se encuentran y compartimos la bebida y la comida y todas las alegrías de la vida con esos nuestros antepasados y se representan en las flores, en el color y en tantas cosas mexicanas.

La singularidad de este festejo de esta celebración ha hecho que la UNESCO declare en noviembre de 2003, esta festividad como un patrimonio oral e intangible de la humanidad. En este contexto, es que quisiera agradecer a los profesores Kobayashi e Inoue su amable invitación a esta ocasión, y agradecer también, como es obvio, a los alumnos que se interesan en esto, y al doctor Garduño por ayudarnos y a través de su generosa colaboración, explicar lo que para nosotros es el Día de Muertos.

Así, una vez más hermanamos a Japón y a México, estoy segura que hoy aprenderán algunas cosas más sobre mi cultura la mexicana. muchas gracias.

MELBA PRÍA Embajadora de México en Japón

死者を弔う、死者と過ごす

公開講演会

—メキシコの文化的伝統『死者の日』—

2022年度千代田学「文化的多様性を持つ千代田区の国際性に関する調査・研究」では、2022年10月29日（土）の午後、メキシコの「死者の日」をテーマとした公開講演会を開催しました。国際コミュニケーション学部主催のこの公開講演会は、在日本メキシコ大使館との共催で、専修大学神田キャンパス10号館（靖国通り沿い新校舎）の「黒門ホール」で行なわれました。区民や一般市民を中心とした約80名の方々が来場しました。



神田キャンパス10号館3階黒門ホール

公開講演会は、根岸徹郎（国際コミュニケーション学部長）が司会・進行役を務め、メルバ・ブリーア閣下（駐日メキシコ大使）のビデオメッセージの後、招待講演者のアルフォンソ・ガルドゥーニョ氏が「死者の日の儀式のおよび象徴的供物」と題した講演をスペイン語（日本語通訳あり）で行ないました。

続いて、小林貴徳（国際コミュニケーション学部准教授）が「故人の回帰を待ちわびて—現代メキシコにおける先住民族の死者の日」、井上幸孝（国際コミュニケーション学部教授）が「死者の日の歴史的背景—メキシコ、文化的混淆の500年」と題した講演を行ないました。最後に、鈴木健郎と宮本文（いずれも国際コミュニケーション学部教授）が中国文化、アメリカ文化の研究者それぞれの観点からコメントし、参加者からの質疑応答を含めた活発な議論がなされました。

当日、会場の入口となるフロアには、専修大学の学生（国際コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科の1～3年次生）の力作である死者の日の祭壇、死者の日を解説するポスターが展示されました。多くの来場者は、開始前や休憩時間に会場前で展示を鑑賞し、公開講演会の内容とあわせて死者の日についての理解を深めることになりました。

専修大学 国際コミュニケーション学部 公開講演会
2022年度 千代田学事業
「文化的多様性を持つ千代田区の国際性に関する調査・研究」

SRE MÉXICO
共催：在日メキシコ大使館

とむら
死者を弔う、死者と過ごす
—メキシコの文化的伝統『死者の日』—
*Esperar a los difuntos y agasajar a los ancestros:
Día de muertos, patrimonio cultural mexicano*

司会 根岸 徹郎（国際コミュニケーション学部長）
ビデオメッセージ メルバ・ブリーア 閣下（駐日メキシコ大使）
招待講演 アルフォンソ・ガルドゥーニョ（スペイン語：日本語通訳あり）
死者の日の儀式のおよび象徴的供物
Ofrenda ritual y simbólica del Día de Muertos
講演① 小林 貴徳（国際コミュニケーション学部准教授）
故人の回帰を待ちわびて—現代メキシコにおける先住民族の死者の日
*Esperando el retorno de los queridos difuntos:
Día de Muertos en los pueblos indígenas de México*
講演② 井上 幸孝（国際コミュニケーション学部教授）
死者の日の歴史的背景—メキシコ、文化的混淆の500年
*Contextualización histórica del Día de Muertos:
Cinco siglos de mestizaje cultural en México*
コメンテーター 鈴木 健郎（国際コミュニケーション学部教授）
宮本 文（国際コミュニケーション学部教授）

入場無料
事前予約 不要
先着200名

祭壇展示アリ

日時 10月29日（土） 14:00-16:30（開場13:45）
会場 神田キャンパス10号館3階 黒門ホール

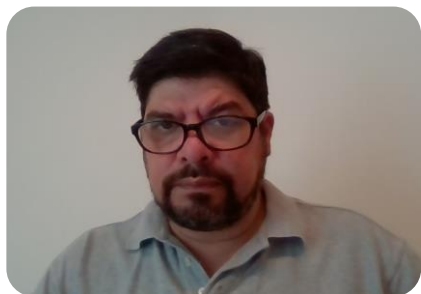
区内の広報版に掲示した告知ポスター



「死者の日」の文化的背景を解説するポスター
（詳しくは11ページに掲載）

死者の日の儀式的および象徴的供物

アルフォンソ・A・ガルドゥーニョ・アルサーベ
(メキシコ国立自治大学 美学研究所)



死者の日の供物に関して展開されてきた現象は実に興味深く、時の経過とともにメキシコ国内だけでなく無形遺産として世界的な祝祭にすなりました。500年以上にわたり、死者に捧げられる供物は、儀礼や葬送から社会・政治・宗教なものへと様々な姿を見せてきました。

死者に対する祝祭や記念行事がとくに広まったのは、19世紀末のことでした。民衆伝統によれば、毎年10月31日から11月3日の間、死者の世界とこの世をつなぐ扉が開き、死者が家族の家を訪れることができるようになります。

食事を用意して死者をもてなすために、様々な食べ物や飲み物を置いた祭壇を設け、花や口ウソクで飾り付けます。こうしてあの世からやってきた死者たちは、喉を潤し、空腹を満たすのです。こうして準備されるものの中には、伝統的なモレ、タマル、チョコレートといった飲食物やマリーゴールドの花があります。これらはすべてスペインによる征服以前にさかのぼることができるものです。さらに、テキーラ、菓子、死者のパンといったスペイン植民地時代に生まれたものもあります。このように、死者の日の供物は、メキシコの歴史・文化的伝統・フォークロアが積み重なってきたものだと言えます。



Ofrenda ritual y simbólica del Día de Muertos

Dr. Alfonso A Garduño Arzave

IIE Instituto de Investigaciones Estéticas, Universidad Nacional Autónoma de México

Los fundamentos y aspectos que se han desarrollado entorno a la ofrenda del día de los muertos son significativos pues se ha convertido a través del tiempo en una de las festividades más relevantes no sólo en nuestro país sino a nivel mundial como patrimonio intangible de la cultura mexicana. Por más de 500 años las ofrendas dedicadas a los muertos han tenido diversas manifestaciones que van desde lo ritual, ceremonial y funerario pasando por aspectos a escala social, política y religiosa.

Es a fines del siglo XIX que se le dio más relevancia, enriquecimiento e impulso en cuanto a sus festejos y elementos conmemorativos, esto es que cada 31 de octubre y hasta el 3 de noviembre según la tradición popular las puertas del mundo de los muertos están en contacto con el mundo material lo que les permite a estos visitar la casa de sus familiares.

Para honrarlos con comida se levanta una ofrenda en el que se instauran diferentes comidas y bebidas, además de flores y velas que permiten satisfacer la sed y el hambre de los difuntos que vienen del más allá. De entre todos estos encontramos el tradicional mole, tamales, chocolate y flores de Cempaxúchitl; todos ellos de origen prehispánico, también podemos incluir el Tequila, dulces y el pan de muerto que tienen su fuente en la época colonial. La ofrenda en si misma es entonces un cúmulo de elementos que van de la mano con la historia, la tradición cultural y el folclor de México.

故人の回帰を待ちわびて

講演

ー現代メキシコにおける先住民族の死者の日ー

小林 貴徳 国際コミュニケーション学部准教授



メキシコの「死者の日」といえば、ガイコツ装飾や仮装パレードのように、華やかで陽気なお祭りがイメージされるかもしれませんが。しかし、私が20年来かよい続けているフィールド、先住民農村ではその祝われかたが少し異なります。重要な祝祭であるものの、それほど華やかで陽気なお祭りというものではないのです。

2003年にユネスコの無形文化遺産に登録された「死者の日」は、正式名称を『死者に捧げる先住民の祭礼』といい、「死者に捧げる祭礼は、先住民族が継承する生きた文化として根付いている。先スペイン期の宗教儀礼と16世紀にヨーロッパから導入されたカトリック祭礼の混淆は、2つの世界観の融合である」と解説されます。文化と民族の多元性を国是とするメキシコでは、先住民族の存在は極めて重要です。政府統計によれば、先住民言語話者は約740万人（3歳以上人口、2022年）であり、全国で67の異なる先住民言語が使用されています。

私が調査しているゲレロ山岳部は国内有数の先住民居住地域ですが、伝統的な焼畑農法によるトウモロコシ栽培が支配的な農村社会です。農作業は季節の移り変わり、すなわち雨季（5月～10月末）と乾季（11月～4月末）に規定され、雨期直前の播種、雨期が終わる頃の収穫というサイクルを構成します。これには祝祭暦も連動しており、種の祝福や降雨祈願、収穫感謝のような農耕儀礼がカトリック祭礼の枠組みで実施されます。このサイクルに当てはめると、カトリック祝祭暦の11月1日（万聖節）と11月2日（万霊節）の「死者の日」は、雨季から乾季への端境期、トウモロコシ収穫が一段落する時節にあたり、回帰する死者をその年の収穫物でもてなす年中行事といえます。

10月末になると人びとは墓地を清掃し、マリーゴールドの花で飾りつけを済ませます。死者の魂は花の香りを道しるべに訪問すると考えられているので、墓地から住居まで花びらを敷くこともあります。家庭内に用意する祭壇では、故人の写真のまわりに花やロウソク、そしてトルティージャやタマル（トウモロコシ粉の団子）などの料理から、蒸留酒やコーラなど飲み物まで、故人が好んだ食べ物を供えます。こうして10月31日の日暮れになると人びとは墓地に集い、それぞれが回帰する故人と語り、笑い、涙を流し、夜を通して死者の魂を慰めるのです。



10月末、墓地を彩る花飾りの準備（ゲレロ州トラコアパ村）



墓地から家庭祭壇まで道しるべとなる花びら（ゲレロ州トラコアパ村）

先住民村落の「死者の日」は、亡くなった愛する家族や親しい友人を迎える、故人との再会を果たす家族の祭りであり、都市部のものと比べるととても穏やかな雰囲気といえます。装飾を眺めても、都市部では際立つドクロの砂糖菓子やガイコツの切り絵、死者のパンは見当たりません。都市部の華やかな「死者の日」も先住民農村の穏やかな「死者の日」も、その祝われかたの多様性こそ、メキシコの多文化性と多民族性を象徴しているといえるでしょう。

死者の日の歴史的背景

ーメキシコ、文化的混淆の500年ー

井上 幸孝 国際コミュニケーション学部教授



私の専門はメキシコ史です。歴史的に見ると「死者の日」は、何百年もの過去の経緯から生成されてきた文化的な現象と言えます。「諸聖人の日（万聖節、11月1日）」と「信仰を持って逝ったすべての人の日（万霊節、11月2日）」を軸とする死者の日は、形式上はカトリックの暦に沿ったものです。けれども、そこには古代メキシコとつながる文化的な要素（死者に対する考え方、マリーゴールドの飾りつけなど）が多く含まれています。



古代メキシコ、テオティワカン（前2世紀～後7世紀）のガイコツの表象

マヤやアステカなど古代メソアメリカ文明が育まれたメキシコは、16世紀以降にヨーロッパの侵略を受け、19世紀前半までスペインの植民地でした。スペイン人はキリスト教を強制しましたが、先住民の間に浸透したカトリック信仰は、元の西洋のものと同じにはなりませんでした。習合（シンクレティズム）と呼ばれる、宗教的な混淆が多く生まれたのです。



グアダルーペの聖母教会の聖母像

南北アメリカ大陸で最大の宗教的巡礼地となっているメキシコ市内のグアダルーペの聖母教会はその有名な例です。アステカの女神が祀られた地に出現した聖母マリアは、先住民だけでなく、さまざまな階層の人たちの信仰を集めています。

メキシコの聖地や特別な信仰の対象は、他にもたくさんあります。サポパンの聖母（ハリスコ州）、エル・プエブリートの聖母（ケレタロ州）、オコトランの聖母（トラスカラ州）、チャルマのキリスト（メキシコ州）、アトーチャの幼子イエス（サカテカス州）など、独特の信仰を集める聖地がスペイン植民地下のメキシコで生じ、現在に至るまで人々の間に根づいています。さらに、聖ヤコブ（サンティアゴ）などの聖人崇敬も元からあった宗教的な要素と混じり合い、メキシコ独自のカトリック信仰が作り上げられました。

このように、死者の日は、スペインによる征服以降、500年以上にわたってメキシコで展開してきた文化的・宗教的な混淆の上に成り立っています。そこには、キリスト教の要素だけでなく、数千年の歴史を持つ現地独自の文明の息吹もまた含まれていると言えるでしょう。



メキシコで人気の聖人の一人、聖ヤコブの像（オアハカ州ティラントング）

「死者の日」の祭壇づくり

展示企画



公開講演会の開催に合わせて実施した展示企画は、死者の魂を迎えるためメキシコの各家庭で用意される祭壇をできるだけ忠実に再現しようとする取り組みでした。

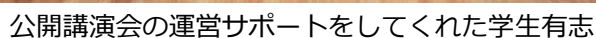
限られた時間と素材のなかでしたが、本学部異文化コミュニケーション学科の1～3年生、約30名が準備作業に関わってくれました。「祭壇づくりと装飾」、「カラベラ（骸骨の張り子）」、「パペル・ピカド（切り絵）」、「解説ポスター」などの各作業を担当する班を設置し、それぞれが助け合いながら制作に臨みました。



参加学生の創意工夫がこめられたカラベラやパペル・ピカードをはじめとする多様な供物が祭壇に所狭しと並べられました。設置作業は講演会開催の前日、夜遅くまでかかりました。

コロナ禍で接する機会がなかった1年生から3年生まで初対面の学生もいましたが、不思議と力強い連帯が生まれました。





完成した祭壇は、講演会当日のみ講演会会場となった10号館3階に設置し、その後、1階の靖国通り側に移設しました。自動ドアが開くたびに風で揺れるパペル・ピカードが通行人の目を引き、夜には口ウソクの灯（電池式）が祭壇の供物を美しく照らしだしていました。

第620号

フィールドワークの経験を話す小林准教授

会場に飾られた「死者の日」の祭壇

学生が作成した展示ポスター

Día de Muertos y Halloween 「死者の日」とハロウィーン

この数十年、メキシコではいまや国民的祝祭として知られる死者の日だけでなく、みなさんもよく知っているあのお祭りが浸透しつつあります。それは、米国の祝祭であるハロウィーンです。現在のメキシコでの死者の日とハロウィーンの関係とはどのようなものなのでしょうか。



まずどのようにしてメキシコにハロウィーンが伝わったのか、ハロウィーンの簡単な歴史と共にご紹介しましょう。ハロウィーンは死者の日の起源とされるカトリックの祝祭、万聖節・万霊節と同じ起源を持ちます。

ヨーロッパで生まれたハロウィーンの伝統と習慣は、イギリスの植民地時代にスコットランドやアイルランドからの移民により、米国に伝わりました。米国に移ってからハロウィーンの宗教的な色彩は薄れ、世俗的で楽しいお祭りへと変わりました。ハロウィーンがいつ頃メキシコに紹介されたのか、詳しいことはわかっていませんが、1960年代頃から既にハロウィーンの影響があったといえます。また、米国と国境を接しているメキシコ北部ではそれよりも前からハロウィーンが存在していたとされています。



メキシコにおけるハロウィーンの浸透は速く、強力なものでした。ハロウィーンは万聖節の前夜祭として位置づけられることもあり、街には死者の日と同じタイミングで関連商品が並びます。死者の日に向けて、人びとの消費意欲が高まる時期に関連商品が出回るということもあり、メキシコにおいてハロウィーンは米国の商業主義的なイメージと重ね合わせて捉えられてもいるのです。こうした歴史状況に危機感を覚えている人々もいます。死者の日をメキシコのナショナル・アイデンティティとしようとする人々はハロウィーンを「国境の北からの侵入」と考え、伝統を脅かすハロウィーンの流行に警鐘を鳴らしています。いずれにせよ、宗教的要素が薄く、娯楽的要素の強いハロウィーンが今後も若者を中心に広がっていくことは想像に難くありません。

＜参考文献＞
河邊英次（2009）『死者の日か、それともハロウィーンか？』
『ラテンアメリカの民俗文化』行路社

国際コミュニケーション学部3年 柿沢涼香

Calaveras, una imagen querida en México メキシコで愛される骸骨人形

メキシコの死者の日を代表するものとして「骸骨」をイメージする人は多いかもしれませんが、しかし、メキシコの人々にとって、それは悲しみや不気味さを象徴するものではなく、死と親しみ、戯れるための愛すべき存在です。



「亡者の顔」：1873年ホセ・グアダルーペ・ボサダ作

その起源は、19世紀後半から20世紀初めにかけて活動した版画家ホセ・グアダルーペ・ボサダにあります。彼は作品の中で、富裕層や政治家を皮肉り、世の虚しさを嘲笑う役割を骸骨に演じさせました。特に、大きな羽のついた美しい帽子を被った女性を骸骨で表現した「ラ・カトリナ」はメキシコで最も有名な骸骨です。それは急速な近代化を遂げようとする国を巧みに表し、贅沢三昧の上流階級への風刺的な意味合いを持っていましたが、今日では死者の日に欠かせない、ユーモラスな死の象徴となっています。



中央に描かれた貴族夫人・カトリナ（「アミダ公園の日曜の午後」）：1947年ディエゴ・リベラ作

実際に、死者の日には、色とりどりの愛らしい骸骨人形が通りに飾られ、街は陽気な雰囲気になります。例えば、パン屋にも、骸骨の形をしたパンが並び、人々は先祖に供えるパンを思い思いに選ぶのです。この「死者のパン（パン・デ・ムエルト）」は祭壇に欠かせない存在で、オレンジの香りと甘さが特徴です。

また、祭壇には「カラベラ（カラベリータ）」と呼ばれる骸骨を模した砂糖菓子も置かれます。その額には故人の名前が刻まれることもあります。今回の「死者の日をつくる」の展示では砂糖を用いてはいますが、カラフルで華やかな骸骨が大いに表現されています。この機会に、骸骨たちと一緒に、死と親しみ、戯れてみてください。



砂糖菓子のカベリータ

国際コミュニケーション学部3年 津田夕希

Los mexicanos y la muerte メキシコ人と死

死者の日を簡単に説明する際、「日本のお盆のようなもの」という表現を用いることがあります。お盆というと少し「しんみり」としたイメージを思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。しかしメキシコの死者の日では、人々が歌い踊り、笑って死者を弔っているのです。なぜこのように陽気な雰囲気のなか行われるのでしょうか。



10月31日の夜、墓地に集った人々と子供たち。©小林貴史

死者の日の起源は古く、先スペイン期まで遡ります。古代メキシコ人は死を神聖化し、神に生贄を捧げる文化を持っていました。また約2500年から3000年もの間、先祖の魂を祝う伝統が守られてきており、頭蓋骨は生と再生を象徴する戦利品としても重宝されていました。死者の日は、このような死を尊び祝う先住民文化と、スペイン人の進出により広まったカトリック信仰が融合した祭礼です。

死を身近に感じる慣習は現在もお受け継がれています。メキシコ人にとってガイコツは死の象徴でありながら、ユーモアに満ちた存在です。ガイコツの貴婦人「カトリナ」は風刺画のシンボルとしてメキシコの人々に親しまれています。また死者の日が近づくと子供たちは学校でガイコツを制作したり、死を連想させる慣用語や言葉が日常的に使われていたりなど幼少期から死と戯れる習慣があるのです。



先住民村の家族で築かれた死者の日の祭壇。©小林貴史

メキシコ人は古くから、死者の世界との世はつながっていると考えてきました。そのため死者の日は墓地でろうそくを灯し、一晩中死者への祈りをささげます。そして死者の魂と語り、歌をうたい楽しい時間を過ごします。彼らにとって死は単に生の終わりではなく、生の延長線として捉えられています。死を身近に感じるからこそ、今を楽しく生きようと思うのではないのでしょうか。このような死生観が陽気でポジティブな死者の日を形作っているのです。

国際コミュニケーション学部3年 館松由佳

Historia del Día de Muertos 「死者の日」の歴史

古代のマヤやアステカは文字や優れた建設技術、暦等の高度な天文学などがあるが、残酷な生け贄が捧げられていた地域として知られている面もあるでしょう。埋葬の仕方は死者の身分によっても異なりますが、一般的には遺灰や遺体は庭や墓地に埋められます。一方で、王や生け贄など「高貴な身分」はピラミッドや神殿を造らせその中に埋葬されることもありました。

アステカ王国での死後の行き先は、3つの世界に分けられていると考えていました。ほとんどの魂が行く世界、水関連で亡くなった魂が行く世界、そして生け贄や戦士が行く世界です。生け贄の儀式は雨乞いや五穀豊穡などの祭祀と関わりがあり、儀式が執り行われている間は歌や踊りが行われていました。また人身供物としては王国の男性や女性、そして子どもたちが犠牲となりました。マヤの場合、セノーテと呼ばれる生贄の体を投げ込んだ泉や、祭祀で使われた球技場もあります。



アステカの死者の国の神、ミクトランテクトリ。©小林貴史

スペインに征服されたメキシコは、「魂の征服」によってキリスト教を強要されました。宣教師らはメキシコの人々が土着信仰の風習をキリスト教に取り入れることをある程度認めました。そのため、メキシコの死者の日は、キリスト教の万聖節



先スペイン期の遺物の様子（後のカトリック化）。
出典：『メキシコ文化』
第4巻、312頁（表紙）



マヤ（ユカタン半島）のセノーテ。©小林貴史

節に合わせて、10月30日から11月1日・2日に行われます。教会の墓地をメインにし、明るい祝祭の様子が見られました。しかし、18世紀になると、教会側は墓地での大騒ぎや飲食などは風紀を乱すとし、厳粛なミサが行われるようになりました。19世紀の独立後、死者

の埋葬は政府管轄に変更され、教会の影響が減少しましたが、伝染病や衛生面などの観点から20世紀前半まで死者の日に際しての過度な祝祭を禁じていました。

21世紀に入り、ユネスコ無形文化遺産に登録されましたが、ハロウィーンの勢いは止まりません。しかし、米国の人気映画の一場面に死者の日のパレードが描写されると、演出にもかかわらず翌年から現地ではパレードが行われるようになり、世界的にも有名な祝祭の1つとなりました。



メキシコ中部都市のパレード。©小林貴史

国際コミュニケーション学部3年 星野綾

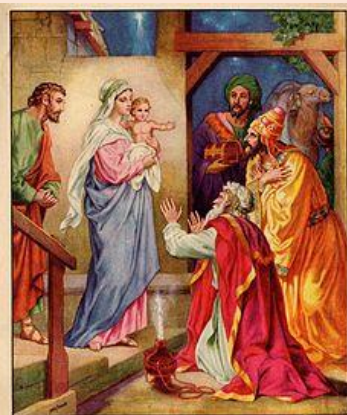
世界のいろいろなクリスマス ーフランスのクレッシュ(crèche)ー (根岸徹郎ゼミ)

12月25日のクリスマス前後に、ヨーロッパ各地ではキリスト生誕の場面を人形で再現した一種のジオラマを見ることができます。中央に生まれたばかりの幼子キリスト、その周りに聖母マリアと聖ヨセフ、さらにベツレヘムの星に導かれてやってきた東方の三博士がいます。また、馬小屋で生まれたということで、いろいろな動物が周りいます。幼子キリストは12月25日までは置かれず、揺り籠は空にされたままが一般的です。フランスではこれを「クレッシュ」と呼びます。

キリストの傍に聖母マリアとジョゼフ、そして東方の三博士（バルタザール、メルキオール、ガスパールの3人。三賢者と呼ばれることもあります。また、三博士の代わりに3人の羊飼いが置かれることもあります）がいて、幼子キリストに、乳香、没薬、黄金を捧げます。

等身大の人形を使うものもありますが、多くは可愛いサイズの人形で、南仏ではサントンと呼ばれる素焼きのテラコッタに彩色した素朴な人形が使われるのが一般的です。

ちなみに、ヨーロッパに限らず、こうした飾りつけは世界各地に広く見られます。メキシコではこのイエス生誕の物語を描くジオラマ模型をナシミアントと呼びます。また、1月6日に東方の三博士が登場し、その脇に3つのプレゼントが置かれるので、子供たちはこの日を心待ちにするのです。



THE VISIT OF THE WISE-MEN
イエス聖誕の場面

NOËL - フランスのクリスマス



キリスト教の救世主イエスの誕生を祝う宗教行事「クリスマス」ですが、その祝い方には世界各地でさまざまな特色があります。また、この日に食べるものなどにも、いろいろ「レッシュ」（キリスト生誕群像）を再現しました。国際コミュニケーション学部の7人の学生が、生まれたばかりの幼子イエスや聖母マリア、動物たちを紙粘土で作り、クリスマスツリーといっしょに飾り付けました。



クレッシュ制作・解説：伊藤希美 藤井咲人
藤井永遠 中曽根京吾
貫井啓吾 橋本聖菜
平山一樹

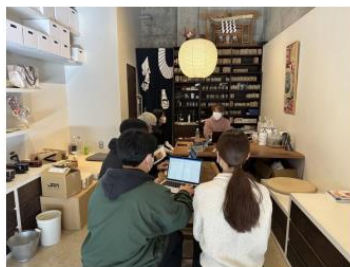
フランスのクリスマスを彩るケーキは「ブッシュ・ド・ノエル bûche de Noël」と呼ばれる、薪（たきぎ）型をしたケーキです。
（ブッシュ＝薪／丸太、正確な発音はビュシュ ノエル＝クリスマス）



フランス独特のクリスマスケーキ：
ブッシュ・ド・ノエル

研究プロジェクト 「千代田学」

地元の店主にインタビュー



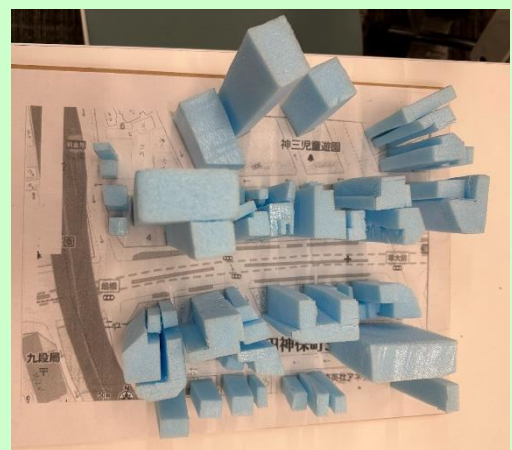
Interview geta_yamatoya

創業明治17年 神田神保町の下駄屋のアカウントです。
コンセプトは「文化を継ぐお店」。
geta-yamatoya.com

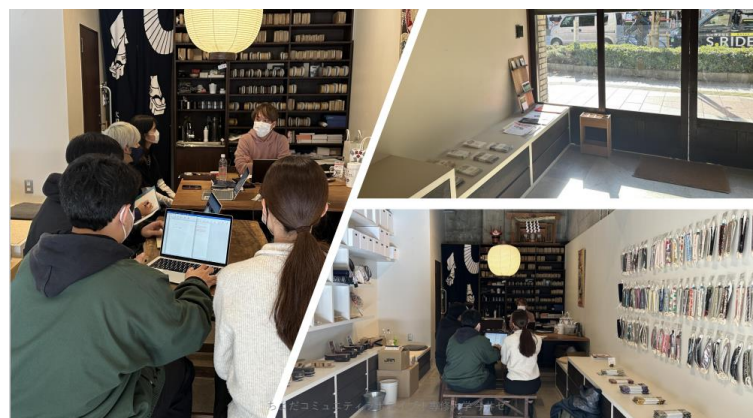
専修大学 国際コミュニケーション学部
今井ゼミ <https://heideimai.com/>



- 一般的な紹介と、都市の新生やジェントリフィケーションなどのトピックを扱う毎週の理論講義の後、学生は街歩き、視覚的なマッピング、観察、インタビューなどのフィールドワーク手法のツールセットを学ぶことができました(10週間のワークショップ)。
- コミュニティを知るために、生徒たちは神保町周辺を10回散歩し、地域を知り、地図を作成しました。10月に最初のインタビューが実施され(2022年12月の日経新聞にも記載されました)、さらに今後取材したい方々のリストが作成されました。



調査地のジオラマ模型

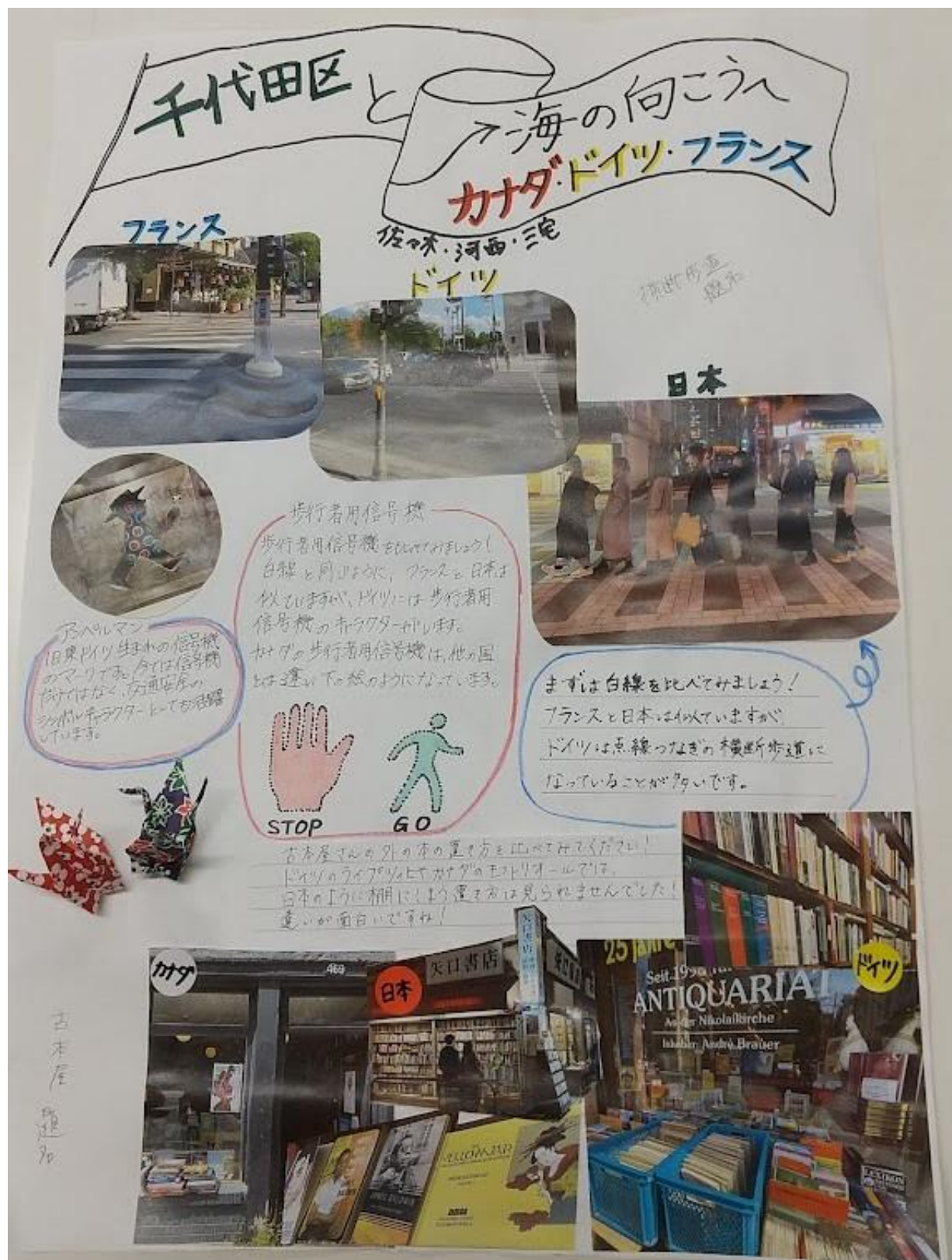


千代田区の魅力や多様性に注目して研究活動を実施しました。私たちは、現地現物現実を重視して、地元の人達と同じ目線で見えることを意識します。そして様々な生い立ちの人々にインタビューしたり、都市での生活と自然の中での生活を比較したりして研究を進めました。

千代田区とカナダ・ドイツ・フランス (柴田隆子ゼミ)

街のイメージがどこから来るのかに着目し、交通標識や横断歩道、店のディスプレイなど街の風景を形作る要素を、それぞれの留学先の街と千代田区神保町界隈で比較しました。

このポスターはその研究成果の一部です。風景の違いは交通にあるのではとの仮説から調査を始めましたが、神保町周辺のマンホールの刻印や道を彩るちょっとしたデザインに気づき、街のイメージを豊かにするための工夫に似ている点もたくさん見つけたようです。





書籍専門店での聞き取り調査〈学生の質問と店主からのコメント〉

Q：韓国書籍店側から見ると、近年の日本や世界からの韓国文学(書籍) に対する反応や評価、販売量、内容などどの様な推移があるなと感じますか？

A：販売量は芸能人の影響や、SNSの発達により年々増加の一途を辿っています。またそれまで韓国の書籍は歴史的背景や、政治的背景を盛り込んだ小説などが多かったですが、女性作家が増加するにつれて2018年に『82年生まれキム・ジョン』、2019年には『私は私のままで生きる事にした』などが邦訳刊行されるなど、エッセイやヒーリング系の書籍が多く出されると、より多くの年齢層をターゲットにした書籍が発売されるようになりました。出版業界から見てもやはり2019年が大きなターニングポイントとなったといえます。

Q：年齢層や性別によって売れる本の傾向等あるのか教えて頂きたいです。

A：学習書は年齢問わず人気があり、エッセイは若者を中心に人気があります。来店する男性は基本的に年齢層が高く、政治的視点や歴史に関する本が人気ですね。また、読めるから本を買いにくるお客様よりも、読んでみたくて本を買いにくるお客様の方が多いようです。

調査後の感想

フェミニズムの内容が多いことやアイドルに本を持たせて本の認知度を上げること、政府が全面的に支援することを通して、本や出版においても韓国の世界を見据える姿勢を感じることができました。また、営業方法や場所の選び方など経営面においてもたくさんのことを学ぶことができました。

(1) 2023年(令和5年)2月15日

ニュース専修

旧李王家邸、赤坂御門の黒田家普請の石垣などを

跡地のホテルニューオータニや、大久保利通の哀

化的多様性に触れた。

旧彦根藩井伊家中屋敷

ガルシア書記官(左)に質問する学生



来年度、メキシコに留学する塚田萌さ

見学。川俣力徹さん(3

ツアー後半にはメキシコ大使館を訪問。コスメ・ガルシア政治担当書記官から、日本とメキシコの交流の歴史についてレクチャーを受けた。

街歩きで歴史と多様性学ぶ

メキシコ大使館、市民団体と連携

国際コミュニケーション学部 千代田学「永田町ツアー」



永田町駅に近接する旧李王家邸を見学

ん(1年次)と高橋春姫さん(1年次)は「メキシコでも日本の漫画が人気だ」というので、ポピュラーカルチャーを入り口にして交流したい」「言葉や文化が異なる世界に飛び込むことの大切さを再認識した」などと語った。



江戸東京ガイドの会：小林英夫さんと峰岸重夫さん



上智大学土手道・真田濠(旧尾張徳川家中屋敷跡)～紀尾井坂～清水谷公園～「贈右大臣大久保公哀悼碑」の道程



- 1888年 日墨修好通商航海条約調印(日本発の完全対等平等条約)
- 1898年 明治天皇が永田町の土地を提供メキシコ公使館(現大使館)を設置



在日メキシコ大使館別館5Fエスパシオ・メヒカーノ

御宿 × メキシコ × 専修大学

コラム

メキシコと日本の歴史的な関係は、1888（明治21）年の日墨友好通商条約、それに続く永田町のメキシコ大使館の設置に始まるどころか、はるか昔、いまから400年以上前にさかのぼります。日墨の交流の始まりと言われるのは、メキシコ（当時はスペインの植民地で、正式にはヌエバ・エスパーニャ副王領）の船が現千葉県沖で難破し、地元の人々に助けられたという事件でした。

1609（慶長14）年、臨時フィリピン総督ロドリゴ・デ・ビベロらが乗ったサン・フランシスコ号は、スペイン領フィリピンからメキシコへ向かう途中、房総半島沖で台風に巻き込まれます。船は大破し、積み荷も失われてしまいますが、ビベロ乗組員は岩和田（現在の御宿町）の人々に救出されました。ビベロは徳川家康にも謁見し、翌1610年、家康の援助を受けて無事にメキシコへ帰国します。その結果、さらにその翌年にはメキシコの副王から感謝の意を表する使節団が日本に派遣されています。この前後の時期には、日本とメキシコの双方に関係する歴史的な出来事が立て続けに起こっています。

1597（慶長元）年には、メキシコ出身のフランシスコ会士で日本に辿りついた聖フェリペ・デ・ヘススが長崎で殉教しました。



17世紀の交流を示す日本・スペイン・メキシコの記念塔。昭和初期に御宿町に建造された。



千葉県御宿町の専修大学御宿セミナーハウス（旧御宿メキシコホテル）

長崎二十六聖人の一人であるこの人物は、メキシコでとくに有名な聖人です。また、1613年には、仙台藩の伊達政宗の家臣である支倉常長率いる一行（慶長遣欧使節団）がメキシコへ渡航し、その後、スペインやローマを訪れています。

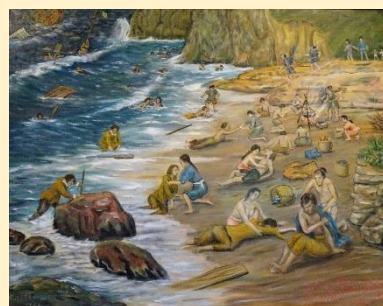
こうした古くからの歴史的なつながりは、開国を経た明治期の日本が最初の平等条約である日墨修好通商条約をメキシコとの間で締結するきっかけになりました。この条約は、日本の陸奥宗光と駐米メキシコ公使マティアス・ロメロとの間で米国において調印されました。

1609年の御宿での救出劇があったことから、1978年に来日した当時のメキシコ大統領ホセ・ロペス・ポルティエリョは、御宿町を訪れ、盛大な歓迎を受けました。町には今も「ロペス通り」と名付けられた道路があり、昭和初期に建造された記念塔も健在です。当時、御宿町で大統領の歓迎レセプションが行われたリゾートホテル（御宿メキシコホテル）は、後に専修大学のセミナーハウスとなり、2022年度まで同大学の施設として運用されました。

今回の千代田学では、同区内にある専修大学とメキシコ大使館の連携により日墨の橋渡しを試みましたが、専修大学とメキシコのつながりは、千葉県御宿町にも以前から存在していたわけです。
(井上幸孝)



ロドリゴ・デ・ビベロらが救出された海岸（千葉県御宿町岩和田）



「サンフランシスコ号乗員遭難救助」（御宿町歴史民俗資料館蔵）

千代田区永田町二丁目の原風景

千代田区内にある外国公館の数は17、それは港区と渋谷区に次いで3番目の多さです。そのひとつ駐日メキシコ大使館は、国会議事堂や首相官邸などが位置し、国政の中心地として知られる千代田区永田町にある唯一の在外公館です。メキシコ大使館はどのような経緯でこの地に設置されることになったのでしょうか。大使館創設前の景観、永田の原風景とはどのようなものだったのかもあわせて歴史を紐解きます。

〈参考〉江戸の大名屋敷（外桜田霞ヶ関にあった福岡藩上屋敷）温故写真集：霞が関福岡藩黒田邸上屋敷（資料番号：88005757）



景山致恭ほか編：尾張屋清七(1849-1862)、『江戸切絵図』外桜田永田町絵図、国立国会図書館



*19世紀半ばに描かれた江戸切絵図には、現在の駐日メキシコ大使館に当たる場所に「土井大隅守」の表記が確認されます。土井家は、三河刈谷藩（現・愛知県刈谷市）に九代続いた徳川幕府の譜代大名でした。維新後の版籍奉還（1869年）により最後の藩主（土井利教）は刈谷藩知事に任ぜられましたが、1871年の廃藩置県で刈谷藩は消滅し、刈谷県を経て、1872年に愛知県に統合されました。



かつて江戸城の周囲、とりわけ外郭の内側は全国大名の上屋敷が立ち並んでいました。しかし、1868年、「江戸ヲ称シテ東京トセン」とする奠都(てんと)を布告した明治政府が武家地を接收する上地令(あげちれい)を発すると、幕末の動乱にあった江戸は急激に荒廃していきます。

江戸人口の半分を占めていた武士は帰郷し、武士相手に商売をしていた商人も地方に移ったためであり、東京市内は家財もなく無人となった武家屋敷ばかりになりました。接收した武家地を政府官員の住居として利用する傍ら、新政府は土地の荒廃を防ぐため桑茶畑への転用政策を進めました。また、皇居前や丸の内には、武力反乱を防ぐための近衛兵の駐屯地が整備され、宮城や諸官庁を防衛するかたちで大名屋敷が軍官舎として用いられました。

明治初期、千代田区内（とくに永田町や霞が関）には多くの外国公館が設置されており、そのひとつにメキシコ公使館（現・大使館）がありました。

御宿沖での海難事故（18ページ参照）ののち、鎖国政策を段階的に強めた日本とメキシコの間には目立った進展は見られませんでした。江戸末期の1874年、メキシコ天文学協会会長だったフランシスコ・ディアス・コバルビアス率いる「金星天体観測隊」の来日が両国関係を250年の眠りから覚めさせました。

横浜郊外と野毛山に基地を置き金星観測を実施したコバルビアスは、報告書『天体観測日本旅行記』（1876年）にて日本社会を紹介するとともに、メキシコ政府に外交関係の樹立を力説しました。その後の紆余曲折を経て、1888年に「日墨友好通商航海条約」が調印されますが、この条約は、互いに治外法権と関税権の拘束を認めず、相互に内地を開放するという、日本が初めて達成した完全平等条約でした。それまで欧米列強と不平等条約ばかり締結させられてきた明治政府は、メキシコとの条約を足がかりに列強国と交渉に臨み、後の条約改正につなげていったのです。

条約締結に続く1891年には横浜にメキシコ領事館が、その翌年にはメキシコ市に日本国領事館が開設されました。さらに明治政府は、1898年、永田町の武家屋敷跡地*を大使館用地としてメキシコ政府に提供します。近代化を進め、国際社会の一員と認められることを課題としてた当時の政府は、徳川歴代の産神として崇められてきた日枝神社にほど近い、永田町一等地の提供というかたちでメキシコへの恩義を表したというわけです。（小林貴徳）



駐日メキシコ大使館（千代田区永田町）

一杖を手に千代田を散策する詩人大使クローデルー

現在のフランス大使館は広尾にあるが、大正末には千代田区の日本橋川にかかる雉子橋のたもとにあった。5代目の全権駐日フランス大使として1921年東京に赴任したポール・クローデルは、ここを「わたしの雉子橋の家」と呼んでとても愛した。もともとは大隈重信の屋敷があった場所で、現在は千代田区役所の庁舎が建っている。



散策中のクローデル



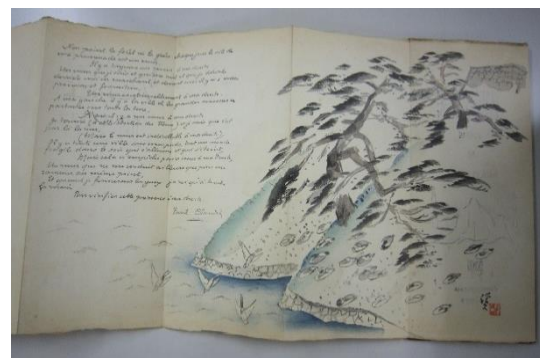
「詩人大使ク氏」として当時の日本人から親しまれたクローデルにとって、皇居の周囲を散歩するのは日課だった。この散歩からインスピレーションを得て書かれた12篇の短詩からなる「内濠十二景」が、「森ではなく、磯でもなく、日ごとにわたしの歩むところには、一つの石垣がある／右手には、つねに石垣がある……左手には街があり、いくつもの大きな道路があら

ゆる方に走り去っている／けれどもわたしの右手には、つねに石垣が存在している……」という描写で始まっているように、右手に皇居の石垣を見ながら進む道順は常に右回りで、現在の皇居マラソンとは逆の方向になる。ちなみに現在の雉子橋は、1923年の関東大震災で落ちた際に、場所を100メートルほど移動して架け替えられたものである。

雉子橋のフランス大使館を出発した詩人は大手門、富士見櫓、外桜田門、柳の井戸、桜田濠へと歩を進める。さらに半蔵門、半蔵濠から千鳥ヶ淵を通り九段坂を下り再び雉子橋へと戻るコース（半蔵濠から北桔橋門へと抜けるコースを取ることもあったようだ）を、クローデルは毎日歩いた。およそ5キロの道のり、ゆっくり歩いて一時間ほどかけての散歩だっただろうか。

最初の任地であるアメリカに赴いてから、駐ベルギー大使を最後に40年以上におよぶ外交官の職を退くまで、北・南米、中国と日本、プラハ、フランクフルト、ローマ、コペンハーゲンといったヨーロッパの都市など、職業柄、世界中を移動する生活を送ったクローデルは日本では中禅寺湖畔や京都を好み、北は仙台から南は鹿児島までさまざまな地を訪れたが、その土台となったのは、この皇居をめぐる日々の散歩だったことだろう。

歩くことは場所を動くことであり、そこから新たな出会いが生まれ、新しい詩想が浮かぶ。夕日を受けたお濠の水が赤く染まると、詩人の目には皇居はこれから旅立とうとする一隻の大きな船となる。こうして夕暮れどきに東京の中心を歩きながら、同時に詩人は時間と空間を超越した、幻想的で不可思議なもう一つの世界へと足を踏み入れていくのだ。



「内濠十二景」の最初の詩と
富田溪仙が描いた皇居のお濠の絵



雉子橋のフランス大使館

散策には必ず、愛用の杖を持って出かけた。この杖が「あるときはわたしの前を行き、あるときはわたしの後に従う」（「杖」）。リズムカルな歩みが目に浮かぶ。杖はクローデルが「世界の踏破へと向かうための熱き道具」であり、「この杖のおかげで、前に進もうとするわたしの意志は歩んでいくこの道に触れる[……]ことができる。[……]杖はわたしの心と道との接触なのだ」。そしてこのとき杖はペンとなり、歩みは詩へと姿を変える。「さあ、出発だ！ 杖を握んだ！ たどるべき道が、今日もまた目の前にある」——「雉子橋の家」の詩人大使は、今日も千代田を歩く。

（根岸徹郎）



学生の声



千代田学どうだった？

既読

葛西 諄香さん

既読

私達の大学生活はオンライン授業がメインで、神田キャンパス付近に思い出は全くありません。しかし千代田学を通して古本屋街や皇居付近、東京ドームなどを巡り、少しですが神田での思い出が増えました。残り一年かけて神保町を学生時代の思い出の場所にしていきたいです。

既読

I was born in Tokyo, but do not know much about its history. Joining the fieldwork, I learned more about the different type of streets including urban and rural area's rojis. Plus I love walking, it keeps me engaged.

中島 哲哉さん

既読

千代田学の取り組みでは、地域の方々と関わることをつうじて、ふだん何気なく通り過ぎている場所に新しい発見ができました。

既読

私はローカルの可能性を信じており、ローカル文化を広める仕事に就きたいと思っています。多くの日本人は、大都市や有名観光地が日本の表看板だと考えているが、フィールドワークと面接プロセスへの参加を通じて、ローカルにも固有の魅力があるという事に気付きました。

鈴木 汐李さん

既読

私は来月（2023年4月）からメキシコに留学するのですが、現地の文化を日本で一足先に友人と一緒に体験できたのはとても良い経験となりました。また、祭壇を校舎の一階に展示したので、千代田区の方々にも足を止めてみていただけました。メキシコの文化を多くの方に伝えることができたと思います。

千代田区の文化的多様性をどう感じた？

既読

三宅 真央さん

既読

私は留学したドイツと千代田区の風景を比較し、ポスターをゼミの方々と一緒に作成しました。歩いて気軽に見つけられることが楽しかったです。コロナ禍であまり学校に来ない学生生活でしたが、千代田学を通して千代田区を少しでも理解でき、有意義な時間を過ごすことができました。

既読

日本で見られる韓国の文化として、今までは音楽やドラマ、映画のイメージが強かったのですが、本という文化にもこれから触れていきたいと思いました。韓国の本は表紙のデザインが綺麗なものが多く、特にその点に惹かれました。小説の短編集を購入したので、読むのが楽しみです。

川俣 力徹さん

既読

もっとも印象深かったのは、メキシコ大使館で受けた日本とメキシコの関係史のレクチャーでした。この千代田区永田町が両国間のきずなの地であるということを初めて知りました。

既読

During the fieldwork I was interested in the different details I see everyday but cannot make sense off. It seems that global cities have changed dramatically as a result of urbanization, and modern cities are gradually becoming similar. Some ancient structures changed their functions or shapes, which you could also clearly see in Jimbocho.

既読

信号ひとつとって比較して見ても、デザインやシステムなど、欧米と千代田では異なる部分がたくさんあります。各国の交通ルールを知ること、国の特性や、どんなことを大切にしているのかを考えることに繋がりました。



活動紹介動画

<https://chiyolab.jp/archives/17284>



ちよだコミュニティラボ 専修大学 活動紹介動画



 専修大学 国際コミュニケーション学部 2022年度 千代田学

2023年3月31日 発行

発行者 専修大学国際コミュニケーション学部

編集 小林貴徳

印刷所 株式会社グラフィカ・ウエマツ

